

## 只見町役場新庁舎+地区センタープロポーザル審査講評

2013年2月17日、最終候補者5社による公開ヒアリングにより、以下の通り選定された。

吉松案の「塔としての庁舎」というコンセプトは秀逸である。只見町の谷間の集落の景観を見渡すレベルに只見リビングという透明な地区センター機能を設け、1階に窓口をはじめ庁舎の業務機能を一元化し、半屋外的な只見広場を只見リビングの足元にピロティ状につくり、雪祭りの広場とも連動させる構成は極めて巧みである。

町庁舎の今後の町づくり、あるいは観光的な拠点づくりにも大いに寄与すると思われる。コンセプトで透明性を掲げており、ガラス面の多用は雪国の対応として1階周りには今後設計段階で十分な調整が必要と思われる。平らな屋根構成も長寿命化が進む町の中での建築のあり方として一つの解である。審査会において10人の審査員全員の支持を受け、最優秀案として決定された。技術的、環境工学的、雪工学的な問題は今後、住民とのワークショップ、専門家の協力により解決されると思われる。自然首都只見町の環境的な新たなシンボルとなることを期待したい。

横河案は2層の建築物としてまとめられ、町並みとの関係の中で空間的にもすぐれた提案であった。特にブックカフェ等が県道側に配され、町並みとの関係に配慮し、地区センターと庁舎の合築、その中間領域として議場（多目的ホール）を配した構成は巧みである。多面体の屋根は美しい外観と豊かな内部空間をつくるであろうと予想されたが、その複合的な形態は多雪地帯における建築として、住民の不安をやわらげられなかった。また、只見町の将来を考えたときに、最優秀案を越える力をもてなかったといえる。

遠藤他案はシンボリックな片勾配の屋根構成の庁舎の提案で、雪に対する提案としても一つのダイナミックな解決方法として支持され、また多様な環境工学的アイデアは審査会で高く評価された。しかし建築計画的に町民ロビーと3層の階構成において全体が有機的に機能するであろうかという疑問が提出され、この問題についてはヒアリングでの説明も十分に説得力あるものになったとはいいがたい。

石原案の曲面をもつ豊かな屋根空間は審査会でも好感をもって支持された。また雪に対する問題についても、さまざまなシミュレーションを行い、真摯に取り組んだ技術、インテリアにおける家具のこだわり等は高く評価された。しかし地区センターと庁舎との関係が隣接はしているが2者の関係については十分説得力ある提案がされていないという印象が持たれた。より一体的に融合されていれば良かったのではないかという意見も出された。

堀場案は木造トラスによる大きなポールト型の屋根形状が地域におけるシンボル性を与え、単純でコンパクトな構成が魅力的な提案である。内部は庁舎機能の上に地区センター機能がのっているもので、構成自体は良いのだが、そのアプローチ等があまりにも集中しすぎていないか。楽しみながら利用するという点から疑問を呈された。

今回のプロポーザルコンペには34者の応募があり、第1次審査で20者が選定され、第2次審査では提出された18者による提案のもとに5社が選ばれた。5者には積雪が3m近い雪国の現状を体験してもらい、雪対策に関する追加提案が要請された。第3次審査では、事前に提案が住民にも示され、住民意見も提出された上で、公開審査会にてプレゼンテーションされ、最優秀者が決定された。

最後に、応募者の皆様のご努力に敬意を表します。

2013年2月17日

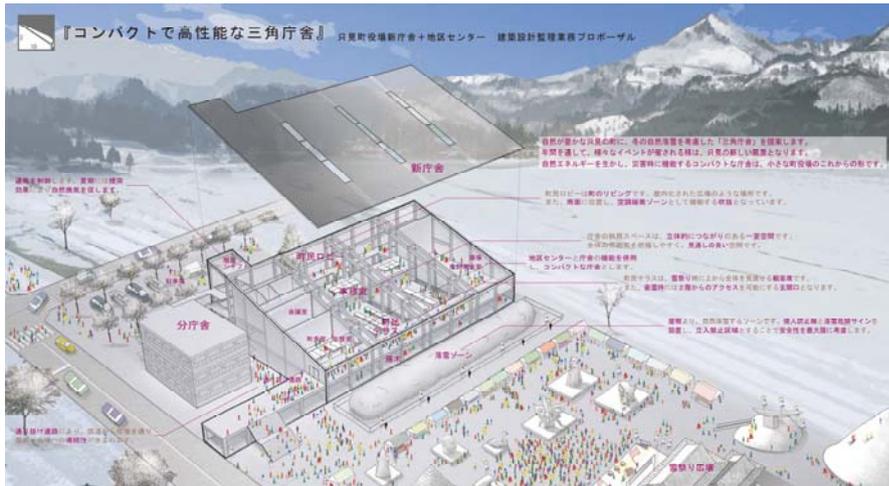
只見町役場新庁舎+地区センタープロポーザルコンペ審査委員長 仙田 満



最優秀：吉松秀樹（アーキプロ）



優秀：横河 健（横河設計工房）



佳作：遠藤政樹（難波和彦・界工作舎+はりゅうウッドスタジオ+EDH 遠藤設計室 設計共同体）



佳作：石原健也（デネフェス計画研究所）



佳作：堀場 弘（シーラコンスケイアンドエイチ）

※各図版は、技術提案書より抜粋